地域マネジメント研究科 地域資源でビジネスチャンスをつかめ

板倉宏昭
いたくら　ひろあき
地域マネジメント研究科
（香川大学ビジネススクール）
教授　研究科長
博士（学術）

オリーブマルシェ開催風景。

香川の特産品オリーブの魅力を発信しようと、高松市の商店街で「オリーブマルシェ」を開催。東京広尾の人気イタリアン「リストランテ・アクアパッツァ」日高シェフと、オリーブオイル鑑定士萩堂紀里さんによるコラボ料理も登場。

「地域活性化と観光創造」をテーマに四国の各界代表者を講師に迎えて講義開催（H26年10月～27年2月）。浜田香川県知事にもご講義いただきました。

香川発の独創的なビジネスプランや観光振興のためのアイデアを広く募集する「香川ビジネス&パブリックコンペ」。寄せられたユニークなアイデアの中からグランプリが決定。

現場を肌で知ることも大切。特産のゆずで活性化を図る高知県馬路村への視察研修。

地域に学び、地域を活かす リーダー養成所

地域マネジメント研究科は、地域活性化への貢献を目的とするビジネススクールです。中四国でＭＢＡが取得できる唯一の経営系専門職大学院であり、国立大学では一橋大学、神戸大学、九州大学に次いで４番目に開校しました。２００４年の開校から10年。地域のなかで実践的に学びながら、習得したノウハウを地域に還元できることもあり、県内外から注目されています。

特筆すべきは、理論と実践のバランスをはかったカリキュラム体系。ビジネス系科目とパブリック系科目のふたつの領域があることが特徴。通常、ビジネススクールではビジネス系科目、つまりマネジメント戦略やマーケティング、ファイナンスなどの科目を重点的に学びますが、地域マネジメント研究科では、行政的な発想を身につけることができるパブリック系科目も充実しています。学生はさまざまなカテゴリのなかから自分に合った科目を選択し、マネジメントする能力などを身につけるのです。「これまで、ビジネススクールで学ぶ経営や経済は、グローバル企業を例にすることが多く、地域の研究はされてきませんでした」と板倉教授。しかし地域の活性化や自立、地域における新しい経済社会活力の創造が求められるなか、地域マネジメントの重要性が明らかになってきたのです。

学びの場は教室にとどまらず、実際の現場に行くことも。「今年は高知県の馬路村に行きました。馬路村はわずか９５０人の山村。ゆずという資源をもとに加工品や化粧品をつくり、通信販売で30数億円のビジネスモデルを確立しています。ここの例を見ると、都市部にだけチャンスがあるのではない。ＩＴを駆使すればどこにいても変わらないということがいえますし、逆に馬路村独自の生き方を売ることで成功しているともいえます。地方や地域は排他的なイメージがありますが、決してそうではないのです」。板倉教授がいうように、地域資源をどうアプローチするか。商品を手に取り、独特なブランドパッケージを目にすれば、商品に加えて田舎暮らしの良さが滲み出てきます。これが地域を付加価値としたアプローチなのです。

香川県にはたくさんの地域資源があります。うどんやオリーブ、手袋、漆器のほか、瀬戸内の多島美という景観もそのひとつ。なかでも注目度が高いのは、香川県の県花県木であるオリーブです。「今、中国の富裕層にはオリーブオイルで作る中華料理の需要が伸びているそうです。また栽培を目的に小豆島に移住した人もいます。保湿効果などのエビデンスも揃いつつありますので、化粧品としても期待できますね。健康志向、おしゃれで平和なイメージ…。オリーブは今後も目が離せません」。

地域から学び、地域に還元する地域マネジメント研究科。グローバルな視野を持ちながら地域に貢献するビジネスリーダーは、ここから誕生しています。

CONTENTS

■ かがアド SPECIAL TOPICS
01 地域マネジメント研究科 地域資源でビジネスチャンスをつかめ
03 COC 地（知）の拠点整備事業 瀬戸内地域活性化プロジェクト
05 「香大生」の夢 チャレンジプロジェクト2014 はばたけ! Bonsai Girls! 棚田発! 日本のこころプロジェクト
■ かがアド FACES
07 家族と地域のつながりから社会を見直す 教育学部　時岡 晴美 教授
09 市民参加で、地域の未来を切り拓こう 法学部　金 宗郁 准教授
11 四国遍路は人生を考えるツーリズム 経済学部　稲田 道彦 教授
13 地域の暮らしを支える在宅医療の未来 医学部　松井 妙子 教授
15 データから考察する未来のビジョン 工学部　紀伊 雅敦 准教授
17 熱帯植物の力がエネルギー革命を起こす 農学部　片山 健至 教授
■ かがアド NEWS
19 評価高まる危機管理研究センターの取組み
■ CENTER INFOMATION
20 キャリア支援センターが新しくなりました!
■ Message from OB
21 株式会社デンネマイヤー COO 知財管理統括　上岡義史 氏

かがアドの動画が楽しめます。

❶「Junaio」（ジュナイオ）のアプリケーション（無料）をダウンロードしてください。

❷「Junaio」のスキャンにて 動画でCHECK!! の写真にスマートフォンをかざしてください。

※電波状況が影響しますので動画が見れない場合はしばらくかざしてください。
※機種によって正常に動作しない場合がありますので、予めご了承ください。

メルマガ登録のご案内

香川大学広報室では月に1度メールマガジンを配信しています。各学部教員による『カダイ・ラボ』や学生によるレポートなど楽しいコンテンツが盛りだくさんです。ぜひご登録ください。

詳しくは『香川大学メールマガジン』で検索
http://www.kagawa-u.ac.jp/admission/mailmagazine/

COC 地（知）の拠点整備事業

瀬戸内地域 活性化プロジェクト

村山 卓
むらやま　たかし
地域マネジメント研究科
（香川大学ビジネススクール）
教授

COC 地（知）の拠点整備事業とは

「COC 地（知）の拠点整備事業」とは、自治体を中心とした地域社会と連携し、全学的に地域を指向した教育・研究・社会貢献を進める大学に対して、国が重点的に支援する事業です。香川大学は平成25年度、この事業採択を受けました。

瀬戸内地域活性化プロジェクトとは

COC採択を受け、香川大学では県内の自治体と連携して、フィールドワークを主体とした全学共通科目「瀬戸内地域活性化プロジェクト」を新設しました。

授業では、学生が実際に地域に入り、定住促進や観光振興、離島振興など、自治体が抱えるさまざまな課題に対して、問題解決策を探ります。今年度は10プロジェクトが進行しています。

学生は地域の方々と交流し、生の声を聞いて、学生の感性を活かした地域活性化策を検討します。カフェ運営、新商品開発、イベント企画など、その手法はさまざま。地域の方から期待されているのは、地域を外から見ることができる客観的な視点、そして学生ならではの行動力や、既成概念にとらわれない斬新な発想です。

プロジェクトを統括・指導する大学院地域マネジメント研究科の村山卓教授は「一年生のうちからフィールドワークに出ることは、社会に触れる第一歩であり、一般常識を身につけ、社会経験を積んでいく機会にもなります。地域とふれあう中で、香川県という土地への愛着も深まります」と、学生にとってのメリットを指摘します。今後も学生と地域がともに刺激し合い、高め合いながら香川の未来を模索していきます。

瀬戸内地域活性化プロジェクトでは、さまざまなフィールドワークを実施。

平成26年度 瀬戸内地域活性化プロジェクト

・かがわ定住促進プロジェクト（香川県）
学生が就職・定住先として香川県を選択するようになるための施策を検討します。

・島活性化プロジェクト（香川県）
瀬戸内の島々固有の文化を活かしながら、島の魅力をPR。交流人口の増加策を検討します。

・高松観光活性化プロジェクト（高松市）
高松を代表する観光地の屋島への観光客誘致を模索し、新たな観光の可能性を引き出します。

・高松定住促進プロジェクト（高松市）
転勤者が多い高松市で、短期間だけ住む県外者の立場に立った高松の魅力を発信します。

・高松の街活性化プロジェクト（高松市）
高松南部3商店街の活性化を目指し、賑わい創出のためのイベント等を企画します。

・高松産業振興プロジェクト（高松市）
高松の伝統産業である香川漆器・庵治石・盆栽について、新たな振興策を検討します。

・東かがわ市定住促進プロジェクト（東かがわ市）
カフェ運営や商品開発、CM制作、盆踊りの復活などの手法で街の活性化を図ります。

・丸亀市定住促進プロジェクト（丸亀市）
丸亀の中心商店街でのカフェ運営、イベント参加などで街の活性化を検討します。

・みとよ・粟島活性化プロジェクト（三豊市）
学生が主体となった産直市場の開催等による農業振興や、粟島地域の活性化を模索します。

・観音寺活性化プロジェクト（観音寺市）
地元の人では気付きにくい「まちなか」の魅力をPRし、定住の促進につなげます。

プロジェクト活動中!

伊吹島で、瀬戸内国際芸術祭の作品のある風景を撮影する「島活性化プロジェクト」のメンバー。

学生市場は今回も盛況!　笑顔のプロジェクトメンバー。

学生市場の代表メンバー、稲田伊知郎さん（左）と吉本修二さん（右）

農家には学生が直接、出店を交渉し、当日の販売もサポート。新鮮な野菜や加工品の魅力をアピールします。

みとよ・粟島（三豊市） 活性化プロジェクト

このプロジェクトの中心の一つは、学生が企画・運営する産直市場を通じて、三豊市の産業活性化を目指す「学生市場」。2014年11月2日は香川西高校で開催されました。朝8時のオープンと同時に、買い物客が続々と。出店している農家と客、売り子でサポートする学生の会話もはずんでいました。

代表メンバーの一人、稲田伊知郎さん（大学院地域マネジメント研究科）は、学生市場の目的について、「対面販売が基本である産直市場を通して、商業の原点を見つめ直したい。生産者と消費者が直接情報交換できる場を作り、三豊市の産業の方向性を地域と一緒に考えたい」と語ります。12月13・14日は高松市常磐町商店街で開催。地域での知名度も上がり、活動の幅を広げています。

このほか、粟島の住民の方々と定期的なディスカッションを行い、将来的な展開を探っています。

島活性化（香川県） プロジェクト

このプロジェクトでは、学生の視点で、瀬戸内の島々の魅力を発見し、PRの方策などを検討します。今年度は女木島・広島・伊吹島の3島をフィールドとして、各島を年間5回以上訪問。風景や観光スポットなどを動画撮影したり、島民の方々との交流も行ないます。10月26日は広島の「さぬき広島いろは石ウォーク」に参加し、島の魅力を探しながら約4時間のコースを歩きました。

11月26日は、伊吹島班は動画撮影のため伊吹島へ。散策路に立つ句碑や、道ばたに置かれた漁網、瀬戸内国際芸術祭の展示場にもなったイリコ加工場跡など、学生自身がおもしろいと思ったポイントを撮影しました。

担当の鈴木健大准教授は、「実際に島に行き、お年寄りなどさまざまな世代の方と話すことで、学生は高齢化や人口減少など島の実態をリアルに知る。島を通じて、香川県全体の将来を考えるきっかけになれば」と語ります。島の課題発見から、島に暮らす人々に真に喜んでもらえる活性化策を一緒に探っていきます。

島のおばあちゃんと一緒に作った伊吹島の「菜ぁ飯（なぁめし）」。地域に残る美味しい郷土料理としてこれからプロデュースしていきます。

動画で島を紹介する伊吹島班。「風景編」「旅行編」で島の魅力を発信していきます。

鈴木健大
すずき　たけひろ
地域連携戦略室　特命准教授
博士（メディアデザイン学）

高松の街（高松市） 活性化プロジェクト

高松市中心商店街の活性化、賑わい創出を模索するプロジェクト。今年度は南新町・常磐町・田町の南部3商店街をフィールドに、商店街の若手スタッフと共同してのイベント企画などを行なってきました。

1月25日には、高松市と共催で「冬の学生文化祭」を開催予定。高松市内の小学校から大学まで、各世代の学生がステージ発表や出店などを行ないます。一年生が事務局を務め、各学校や商店街の各店舗との交渉なども行なうことで、マネジメントの手法やビジネス文書の書き方などを実際に学べる機会となっています。

2013年に行われた大学生による浴衣ショー。

女性目線で「かわいい盆栽」をPR

はばたけ! Bonsai Girls!

「香大生」の夢チャレンジプロジェクト2014

高松市の地場産業である盆栽。しかし「盆栽は高価」「高齢者の趣味」というイメージが先行しがちです。そこで、女子大生の目線から盆栽の魅力を発信し、盆栽の普及・PRに一役買いたいというのが、この「Bonsai Girls」プロジェクトです。

「高松市出身ですが、盆栽のことは何も知らなくて。たまたま体験した苔玉作りから、盆栽に興味を持ちました」と、代表の武上実佑さん(経済学部3年)は参加のきっかけを語ってくれました。

現在のメンバーは9名。主な活動としては、フィールドワークとして2ヶ月に一度、鬼無町の女性盆栽作家の花澤美智子さんの元で、盆栽作りを学んでいます。作った盆栽は自宅で育て、facebookで育成日記を公開。また学祭や市内のイベント等で、子供向けの盆栽作りワークショップを開催しています。

2014年10月29日から11月3日まで高松市で開催された「高松盆栽大会」では、主会場の一つの玉藻公園・披雲閣で、メンバー合作の盆栽棚を展示。女性盆栽士・森友美さん、花澤美智子さんとメンバー有志の対談も行われました。

海外での人気が高まっている盆栽ですが、国内の愛好者は減っています。そんな実状に、「学生や若い世代に、盆栽をもっと知ってほしい。日常会話の中で普通に『盆栽』という言葉が出るようになれば」と語る武上さん。今後もさまざまな手法で〝かわいい盆栽〟をアピールしていきます。

1「Bonsai Girls」メンバー。

2 10月30日、玉藻公園・披雲閣の「高松盆栽大会」に参加。「自分の部屋に盆栽がある光景」というテーマで合作の棚を展示し、女性盆栽士・森友美さんとの対談も行いました。

3 代表の武上実佑さん。「卒業しても情報発信を続けたい。ゆくゆくは盆栽に関わる仕事ができたら」と盆栽に対する情熱を語ります。

米作体験で棚田の保全を考える。

棚田発! 日本のこころプロジェクト

11月2日、農学部収穫祭に登場した「中山の棚田米のおにぎり無料配布」コーナー。300個のおにぎりは30分で品切れとなる好評ぶりでした。このコーナーを出店したのが「棚田発!日本のこころプロジェクト」です。

「昨年夏、インドネシアと日本の学生の交流研究で小豆島町の中山地区に滞在した時に、棚田を守りたいという地域の方々の思いを知ったのがきっかけです」と代表の田中花奈さん(農学部2年)。「全国棚田百選」にも選ばれた中山地区の棚田は、高齢化に伴い、耕作放棄地が増加しています。約30人のメンバーは、中山地区の「棚田オーナー制度」にボランティアとして参加し、実際に米作体験をしました。4月の籾まきから始まり、田植えや草取り、9月の稲刈まで、小豆島での滞在は10回ほど。7月には地区の伝統行事「虫送り」にも参加しました。

「農業経験はほぼ初めてのメンバーばかり。棚田は機械を入れられないので、ほぼ手作業で、田植えも手植え。水路を維持する落ち葉掃除が特に大変でした」と言う田中さん。棚田保全の難しさを実感し、自分たちにできることを考えています。

来年以降も継続して学生が参加できるよう基盤作りをしたいとのメンバーの希望に沿い、小豆島町役場の方でも、受け入れ態勢を整えていくそうです。学生の力は、地元の方々にも大きな支えとなっているようです。

【「香大生」の夢チャレンジプロジェクトとは】
学生の自主性や積極性、創造性を高め、学生生活を充実させることに役立つよう、学生から提案された魅力的・独創的な事業に対し、学生生活委員会より経費を配分して実施するものです。26年度は13プロジェクトが採択されています。

1現在のメンバーは約30人。農学部収穫祭では、棚田米のおにぎり配布の他、棚田米を使った餅つきも行ないました。

2代表の田中花奈さん。「虫送りに使うたいまつを、地域の皆さんと一緒に作ったのが楽しかった」と、思い出を語りました。